

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第45集

# 館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成20年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

問堀1遺跡（平20地点）

小林遺跡（平20地点）

大袋城跡（平20地点）

大街道遺跡（平20地点）

北小袋遺跡（平20地点）

館林城跡・城下町（平20地点）

上三林古墳（平20地点）

加法師遺跡（平20地点）

2008  
館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第45集

# 館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成20年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

間堀1遺跡（平20地点）

小林遺跡（平20地点）

大袋城跡（平20地点）

大街道遺跡（平20地点）

北小袋遺跡（平20地点）

館林城跡・城下町（平20地点）

上三林古墳（平20地点）

加法師遺跡（平20地点）

2008  
館林市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、平成20年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成20年度の調査であることから、「平成20年度地点」とする。

なお、間堀1遺跡については、記録保存のための発掘調査である。

間堀1遺跡	小袋遺跡	大袋城跡	大街道遺跡
北小袋遺跡	館林城跡・城下町		上三林古墳
加法師遺跡			

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会
担当課	文化振興課文化財係
調査組織	教育長　橋本　文夫 教育次長　齊藤　良雄 文化振興課長　田中　耕平 文化財係長　岡屋　英治 主査　荒川　博一 主事(学芸員)　吉田　紋乃 主事(学芸員)　吉村　昭和 主事補　堀越　峰之 主事補　須藤　美樹 調査作業員

4. 調査作業員

大山隆司	久田進	伊川暢一	橋本二三夫	内山敬三
江田勝美	小島たみ子	影山佳子	阪口丈夫	宮田圭祐
延命香奈子				

5. 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。

6. 本書の編集・執筆については、荒川、堀越が中心となり行った。

7. 遺物の実測及び遺物観察表の作成は、宮田圭祐が行った。

8. 調査の実施および本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同)

館林市都市建設部道路河川課	館林市都市建設部都市計画課
館林市史編さんセンター	技研測量設計 株式会社
株式会社 青木建設工務所	地権者各位

## 凡　　例

1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
2. 遺跡位置図は、館林市都市計画図（S=1/10000）を1/5000に拡大し用いた。なお遺跡位置図中のスクリーントーン は遺跡地、 は調査地を示している。
3. トレンチ図は、館林市道路台帳（S=1/1000）を用いた。
4. 写真図版で▲印を付した写真是、紙面の都合により写真左を上、写真右を下に配置した。
5. 方位は全て磁北を表す。

## 目 次

例 言.....	1
凡 例.....	2
目 次.....	3
挿図目次・表目次.....	4
写真図版目次.....	5
第1章 館林の環境.....	6
1. 地理的環境.....	6
2. 歴史的環境.....	6
第2章 調査概要.....	9
1. 間堀1遺跡.....	9
2. 小林遺跡.....	16
3. 大袋城跡.....	19
4. 大街道遺跡.....	21
5. 北小袋遺跡.....	23
6. 館林城跡・城下町.....	25
7. 上三林古墳.....	28
8. 加法師遺跡.....	30
参考文献.....	33
写真図版.....	35
報告書抄録.....	41

## 挿図目次

第1図 館林市の位置	6
第2図 館林市の地形概念図	8
第3図 平成20年度調査遺跡の位置	8
第4図 間堀1遺跡	9
第5図 調査地全体図	10
第6図 3号住居址平面図	11
第7図 4号住居址平面図	11
第8図 5号住居址平面図	12
第9図 6号住居址平面図	13
第10図 集石土坑平面図	13
第11図 出土遺物実測図	15
第12図 小林遺跡	16
第13図 トレンチ配置図	17
第14図 出土遺物実測図	18
第15図 大袋城跡	19
第16図 トレンチ配置図	20
第17図 大街道遺跡	21
第18図 トレンチ配置図	22
第19図 北小袋遺跡	23
第20図 トレンチ配置図	24
第21図 館林城跡・城下町	25
第22図 トレンチ配置図	26
第23図 1トレンチ土層断面図	27
第24図 3トレンチ土層断面図	27
第25図 上三林古墳	28
第26図 トレンチ配置図	29
第27図 加法師遺跡	30
第28図 トレンチ配置図	31
第29図 出土遺物実測図	32

## 表目次

第1表 間堀1遺跡遺物観察表	14
第2表 小林遺跡遺物観察表	18
第3表 加法師遺跡遺物観察表	32

## 写真図版目次

写真図版 1 .....	35	写真図版 4 .....	38
1-1 間堀 1 遺跡 調査地		4-3 大街道遺跡 2 T 完掘	
1-2 邊構確認		4-4 埋め戻し	
1-3 3号住居址完掘		5-1 北小袋遺跡 調査地	
1-4 4号住居址完掘		5-2 作業風景	
1-5 5号住居址完掘		5-3 2 T 完掘	
1-6 6号住居址完掘		5-4 3 T 完掘	
1-7 1 T 遺物出土状況		6-1 館林城跡・城下町 調査地	
1-8 1 T 遺物集中箇所		6-2 重機掘削	
 写真図版 2 .....	36	 写真図版 5 .....	39
1-9 間堀 1 遺跡 石皿出土状況		6-3 館林城跡・城下町 作業風景	
1-10 集石土坑		6-4 1 T 土層確認	
1-11 完掘		6-5 2 T 土層確認	
1-12 出土遺物		6-6 3 T 土層確認	
2-1 小林遺跡 調査地		6-7 4 T 土層確認	
2-2 1 T 遺物出土状況		6-8 5 T 完掘	
2-3 1 T 遺物出土状況		7-1 上三林古墳 調査地	
2-4 燃土検出		7-2 作業風景	
 写真図版 3 .....	37	 写真図版 6 .....	40
2-5 小林遺跡 1 T 完掘		7-3 上三林古墳 2 T 粘土層検出	
2-6 2 T 完掘		7-4 1 T 完掘	
2-7 埋め戻し		8-1 加法師遺跡 調査地	
2-8 出土遺物		8-2 1 T 完掘	
3-1 大袋城跡 調査地		8-3 2 T 完掘	
3-2 1 T 完掘		8-4 3 T 完掘	
4-1 大街道遺跡 調査地		8-5 井戸址完掘	
4-2 1 T 完掘		8-6 出土遺物	

# 第1章 館林市の環境

## 1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km<sup>2</sup>である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県・埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。群馬県東南部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。館林市の標高は、15m台（大

島町東部）から33m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東に向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。

## 2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（亦生時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のような。

#### 《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

#### 《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

#### 《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

#### 《古墳時代》

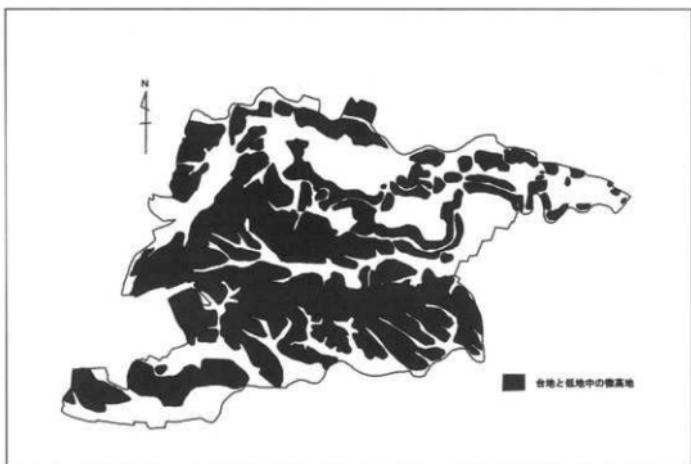
前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヵ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

#### 《奈良・平安時代》

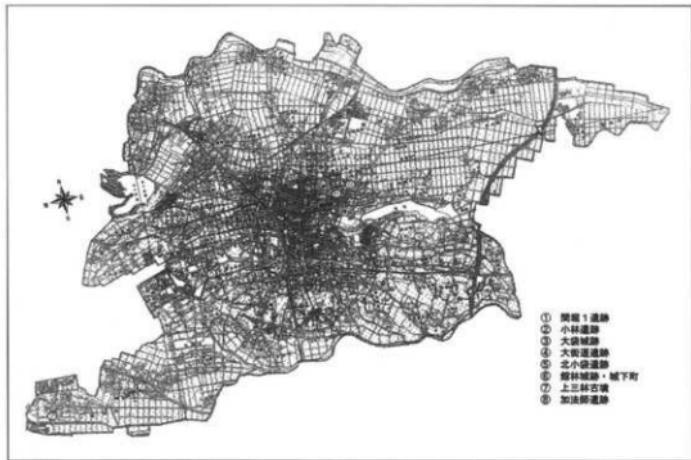
この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

#### 《中世・近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成20年度調査遺跡の位置

## 第2章 調査の概要

### 1. 間堀1遺跡



第4図 間堀1遺跡 (1 : 5000)

#### 遺跡周辺の環境

間堀1遺跡は、館林市街地の南東部、館林市立第四中学校の東側に隣接する、縄文時代の集落跡を含む遺跡である。

本遺跡は、邑楽・館林台地南辺は東流する谷田川の細長い支谷が複雑に入り組んでおり、後に蛇沼を形成する北西に延びた谷とその北側の谷との合流点にある舌状台地上に所在する。

周辺の遺跡としては、北側に延びる谷の対岸に縄文・平安時代の間堀2遺跡、蛇沼を挟んだ対岸に縄文・奈良～平安時代の神明前遺跡、同じ舌状台地の南東方向には縄文・古墳～平安時代の上ノ前遺跡と谷向遺跡が広がっている。

遺跡周辺は中学校が建設された以外は大きな開発はされておらず、多くの田畠に囲まれた閑静な住宅地となっている。西側に広がる蛇沼湿原にはオニバスなどの貴重な植物が今でも残る。

本遺跡の調査は、昭和57年度に遺跡北西端部分で行われ、縄文時代前期の住居址1軒、縄文時代中期の住居址6軒、土坑2基などが見つかっている。

今回の調査地は、前回実施された場所から南東へ70mほどの所にあり、遺跡の南側にあたる。

#### 調査の経緯

平成20年1月29日に代理人より個人住宅建設の計画があるとの話があり、市教委では過去に現地北側で調査がおこなわれた際、縄文時代の住居址が多数確認されたことから、2月28日から3月11日にかけて試掘・確認調査を実施した。その結果、縄文時代住居址を3軒確認したことから、改めて代理人と協議。建設予定地のうち、保存が不可能な部分については記録保存のための発掘調査で対応することとなった。

発掘調査は、平成20年5月15日から同7月1日の期間にわたっておこなわれた。調査対象面積は約144m<sup>2</sup>であった。

調査の結果、狭小な調査範囲の中でも縄文時代中期の住居址4、集石土坑1、遺物集中箇所1、土坑1などが確認され、それに伴う縄文時代中期の土器・石器の多量出土が見られた。

#### 所在地

館林市上赤生田町字上ノ前3466-2

調査原因 個人住宅建設

#### 調査期間

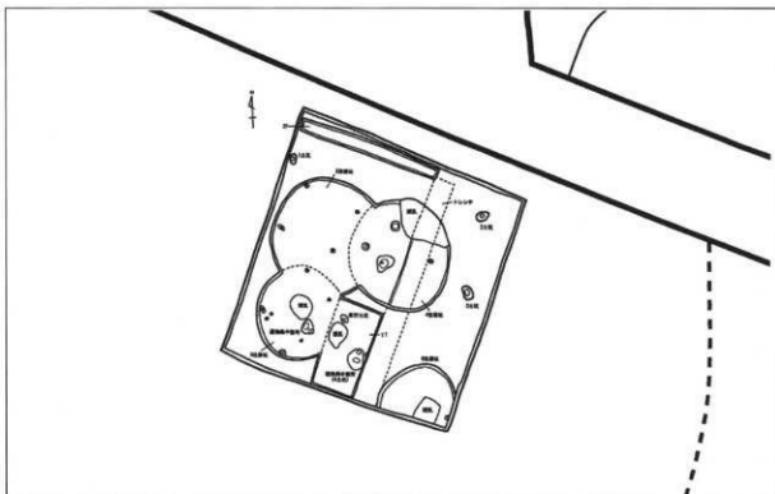
平成20年5月15日～7月1日

調査面積 144m<sup>2</sup>

## 調査の概要

間掘1遺跡の調査は、試掘・確認調査時に住居址が確認された3カ所のうち、駐車場を建設する範囲約144m<sup>2</sup>に限っておこなうこととした。

調査区域を土木重機にて表土排除をおこない、表土以下の土は人力にて掘り下げた。その結果、試掘・確認調査で確認されていた住居址（3号住居址）以外にも、隣接あるいは重複して縄文時代住居址が3軒検出された（4～6号住居址）。これらの住居址ではわずかな焼土が確認されたが、炉としては不明瞭であった。そのため、出土遺物や覆土の状況から住居址であることを判断した。



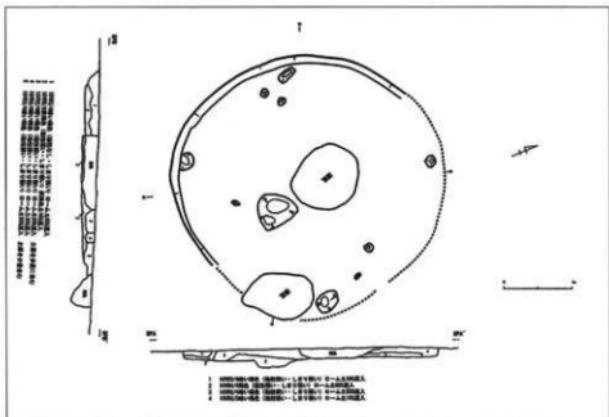
第5図 調査地全体図

## 検出された遺構・遺物

### 【3号住居址】

本住居址は調査地南西部分で検出された。試掘・確認調査時に住居のほぼ中央がトレンチにかかっており、縄文土器の一括出土があったことから住居址と判断された。住居北側が5号住居址と重複しており、切り合ひの状況から本住居址の方が新しい。

住居は南北約4m、東西約3.5mの梢円形を呈する。床はローム面でしまりは強くない。住居中央やや西寄りをトレンチが貫いている。住居東側と中央には擾乱箇所があった。柱穴は、南端と西端、北端で計3ヶ所確認された。炉は検出されなかった。遺物は、住居の中央やや南東寄りで遺物集中箇所が見られた。また、住居の覆土中からも土器片が多く出土した。いずれも縄文時代中期のものである。

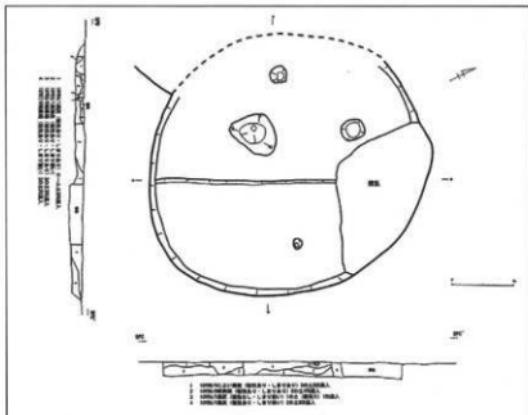


第6図 3号住居址平面図

#### 【4号住居址】

本住居址は調査地の中央やや北寄りで検出された。試掘・確認調査時は遺物や住居に関係する遺構の検出がなかったため判別できなかった。西側が5号住居址と重複しているが、本住居址の方が新しい。

住居は東西約4.4m、南北約4.5mのほぼ円形である。床はローム面でしまりは強くない。住居東をトレンチが貫いており、住居北側は擾乱されている。また、住居南西に掘り込みが見られたが性質は明らかにできなかった。柱穴は北側と西側で2カ所確認された。炉や貯蔵穴は検出されなかった。遺物は覆土中から縄文時代中期の土器片等が出土している。

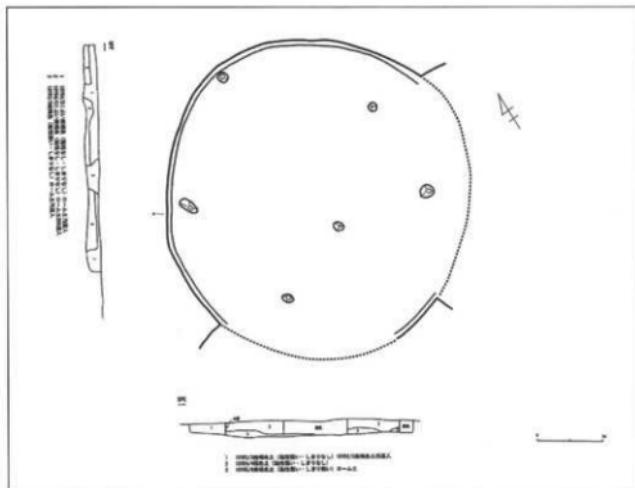


第7図 4号住居址平面図

#### 【5号住居址】

本住居址は、調査地の中央やや西寄りで検出された。試掘・確認調査の際は住居の特徴を示す遺構等の検出がなかったため判別できなかった。3号住居址、4号住居址と重複しており、切り合いの状況から3軒の住居址のうち最も古い。

住居は、東西約4.8m、南北約5mのほぼ円形を呈する。床はローム面でしまりは強くない。住居中央をトレンチが貫いている。柱穴は西端で2ヵ所確認された。炉や貯蔵穴は検出されなかった。遺物は覆土中から縄文時代中期の土器片等が多く出土している。

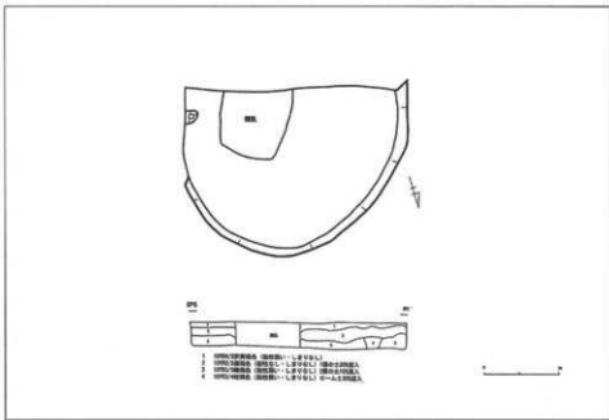


第8図 5号住居址平面図

#### 【6号住居址】

本住居址は、調査地の南東角で検出された。試掘・確認調査時はトレンチ間にあっており確認はできなかつた。

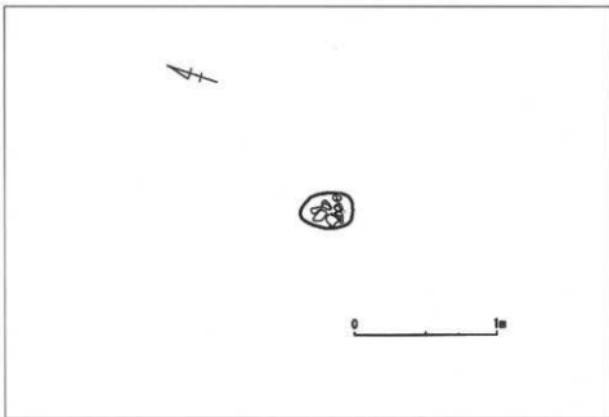
住居は、調査地南東の境界にかかるため検出されたのは北半分だけであった。東西約2.4m、南北約3mと梢円形を呈している。住居の東寄り部分は攪乱の痕跡が残っていた。床はローム面でしまりは強くない。柱穴、炉、貯蔵穴は検出されなかった。遺物は覆土中より縄文時代中期の土器片が出土した。



第9図 6号住居址平面図

【集石土坑】

集石土坑は、調査地の南寄りで確認された。遺構確認中に縄文土器片が多く見られたことからトレンドを設定し部分的に掘り下がったところ小石がまとまって出土した。3号住居址の東に隣接している。土坑の大きさは直径約40cm、深さ約17cmで、土坑上部には直径約7cmの石が7個あり、最深部からは石皿の破片が出土した。



第10図 集石土坑平面図

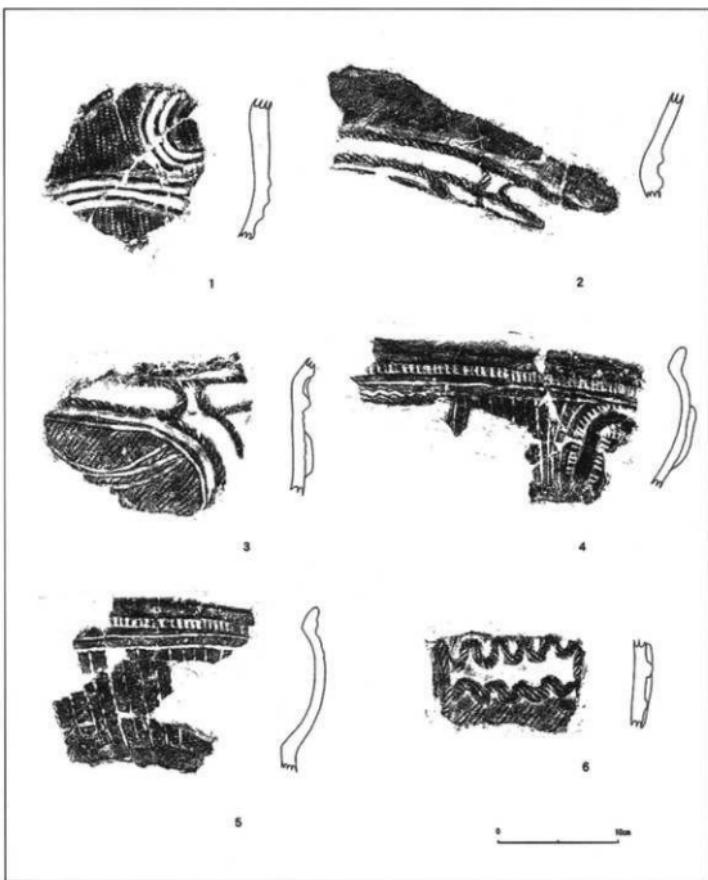
### 出土した遺物

今回の調査では土器や石器の出土が多く見られた。出土した遺物のほとんどは縄文時代中期に比定される。

ここでは、出土遺物の中から実測した代表的なものを掲載する。

表1 遺物観察表

No	種別 器種	法量	整理・調整方法等	胎土	①色調 ②焼成	残存度	出土 位置
1	深鉢	口径 底径 器高	外面：縄文LR 施文後縁帯を貼り付け。縁帯の脇を丁寧にナデる。	角閃石 石英 白色粒	①明赤褐色 ②良好	破片	3住 覆土
2	深鉢	口径 底径 器高	外面：横に平行する2条の縁帯を貼り付け、その脇を丁寧にナデつける。2条の縁帯を繋ぐように2本の粘土紐を貼り付け、縁帯上に縄文RLを施す。	長石 角閃石	①にぶい黄褐色 ②良好	破片	3住 覆土
3	深鉢	口径 底径 器高	外面：No.2と同一個体。縁帯上・胴部共に縄文RLを施した後縁帯に沿うように2条の沈線を施す。また、右上から左上に3条の沈線を施す。	長石 角閃石	①浅黄褐色 ②良好	破片	3住 覆土
4	深鉢	口径 底径 器高	外面：口縁部に平行し半裁竹管文の工具による押引文と1条の沈線が施される。沈線の下方には右から左端にかけて波状沈線と左から右方向へ棒状工具による押引文が施される。胴部は網走する棒状工具による押引文と縁帯に沿うように半裁竹管状工具による押引文が施される。	角閃石 石英 小礫	①明赤褐色 ②良好	口縁部 破片	1T 覆土
5	深鉢	口径 底径 器高	外面：No.4と同一個体	角閃石 石英 小礫	①にぶい赤褐色 ②良好	口縁部 破片	1T 覆土
6	深鉢	口径 底径 器高	外面：地文に縄文RLを施し縁帯を貼り付け、縁帯によって区画された部分を磨消している。その後縁帯上に縄文RLを施す。	白色粒 小礫	①明赤褐色 ②良好	破片	3住 覆土



第11図 出土遺物実測図

## 2.小林遺跡



第12図 小林遺跡 (1 : 5000)

### 所在地

館林市野辺町字申子985-1～1009-1

### 調査原因

道路拡幅工事

### 調査期間

平成20年7月9日～7月18日

### 調査面積

384.91m<sup>2</sup>

### 遺跡周辺の環境

小林遺跡は、館林市南西部を東西に走る県道熊谷・館林線と、その南方を東へ流れる新谷田川の間にあり、邑楽・館林台地の南に沿って流れるこの川に面すように位置し、台地の南縁上に広がっている。この遺跡の南には、利根川に沿って東西に沖積低地が伸び、一帯は利根川の氾濫原となっている。

本遺跡は、「館林市の遺跡」には古墳時代から平安時代の遺物散布の見られる埋蔵文化財包藏地として登載され、周辺には西に平安時代の申子遺跡、東には同じく平安時代の東山遺跡や新田西遺跡がある。

現在この付近には目立った開発はなく、静かな農村風景となっているが、本市の南西に接する邑楽郡千代田町の昭和工業団地を南に遠望できる位置にあり、主要地方道足利・邑楽・行田線や前述の県道熊谷・館林線など交通には恵まれており、将来的に開発の見込まれる地域である。

今回の調査地は遺跡の南西部分にある。平成19年度に北側の道路拡幅部分を調査したところ、弥生時代後期の土器片が3点出土している。

### 調査の概要

小林遺跡（平20地点）の試掘・確認調査は、道路拡幅部分の地形に合わせ、東西方向に5本のトレンチを設定し、人力により表土排除を行った。表土以下の土は上層断面の観察を行いつつ掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

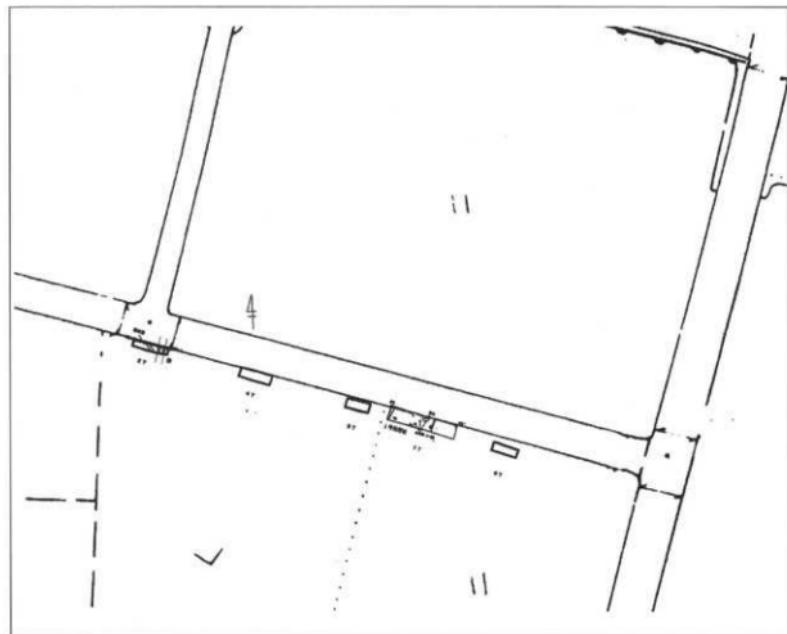
調査区域において現地表面からローム層までの深度は40～80cmであった。

今回の調査地は道路拡幅部分のみということで範囲がかなり限定されていた。1トレンチでは、ローム面を切る黒色土の広がりが確認されたため、トレンチの範囲を広げ精査した。掘り込みの幅は東西で約3.6mであった。その後掘り込み部分の掘削をおこなったところ、一括個体の土師器や大量の焼土を検出。遺物等の状況から古墳時代後期の住居址と判明した。

2トレンチでは、東側で南北に延びる細い溝状の遺構を検出したが、調査範囲が限定されていたことから遺構の性質を判断するには至らなかった。

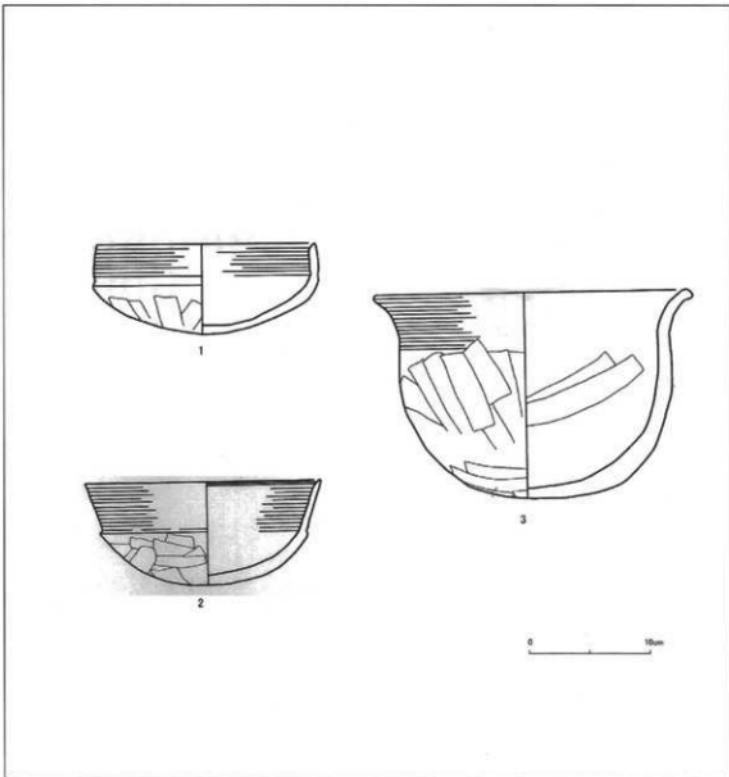
遺物は、1トレンチの住居址から土師器が多く出土したほか、他のトレンチからは中近世と思われる陶磁器片などが出土地した。

今回の調査において、古墳時代の住居址を1軒確認したが、道路拡幅部分のみという狭小な範囲であったため、これ以上の調査継続が難しい状況であったため、可能な範囲での記録保存をおこなった。そのため調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第13図 トレンチ配置図 (1 : 400)

No	種別 器種	法量 (cm)	整形・調整方法等	胎土	①色調 ②焼成	残存度	出土 位置
1	土師器 坏	口径: 11.3 底径 器高: 4.6	外面: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面: ヨコナデ	角閃石 白色粒	①明褐灰色 ②良好	ほぼ完形	1住 覆土
2	土師器 鉢	口径: 16.3 底径 器高: 10.6	外面: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面: ヘラナデ	長石 角閃石	①明赤褐色 ②良好	ほぼ完形	1住 覆土
3	土師器 坏	口径: 12.2 底径 器高: 5.3	外面: 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面: ヨコナデ	茶褐色粒	①明黄褐色 ②良好	口縁部～ 胴部 一部欠損	1住 覆土



第14図 出土遺物実測図

### 3.大袋城跡



第15図 大袋城跡 (1 : 5000)

#### 遺跡周辺の環境

大袋城跡は、館林市東部に位置し、県道板倉・棚谷線と県道つつじが岡線の交差点の東方約600mに位置している。

城沼とその南の古城沼の二つの低湿地を核とした周辺台地上に分布する遺跡の一つである。古城沼にはその中央部へ向かって南西から半島状に突き出す洪積台地があり、南西侧を除いた三方を古城沼及びこれに伴う低湿地に囲まれたこの台地とその付け根付近には、以前より中世城館址の大袋城が推定されている。

現在台地上は宅地化された部分が多く、城館としての面影を留めていると思われる部分は限られている。

本遺跡の周辺には、縄文時代から中世に至る遺跡が点在しており、大袋I遺跡、大袋II遺跡、花山東遺跡、下志柄遺跡（いずれも縄文時代）、大袋4遺跡（縄文・平安時代）、大袋3遺跡、大袋5遺跡（ともに平安時代）、古墳では富士山古墳、下志柄古墳、町谷1号墳、中世城館址の青山屋敷跡などがある。このうち昭和55～56年度に調査された大袋II遺跡では、縄文時代の住居址が10軒確認されている。

今回の調査地は、遺跡の北端に位置している。

#### 所在地

館林市花山町字大袋2270-11

#### 調査原因

宅地造成

#### 調査期間

平成20年8月22日～9月2日

#### 調査面積

1,072.73m<sup>2</sup>

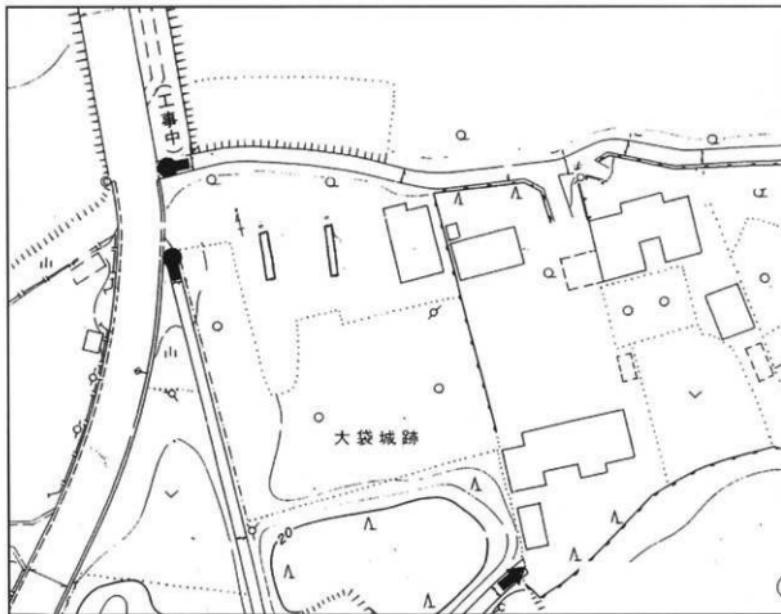
### 調査の概要

大袋城跡（平20地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査地は土の入れ替えがされており、掘削深度が120cmを超えて砂石やコンクリート片などが混在してローム層を確認することはできなかった。

開発業者の話によると、過去に山林を伐採した際に大規模な掘削がおこなわれていたとのことであった。今回の調査で、遺物の出土はなかった。

本調査区域において保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第16図 トレンチ配置図 (1:400)

#### 4.大街道遺跡



第17図 大街道遺跡（1:5000）

##### 所在地

館林市大街道一丁目614-2～631-7

##### 調査原因

道路改良工事

##### 調査期間

平成20年8月22日～9月2日

##### 調査面積

2,000m<sup>2</sup>

##### 遺跡周辺の環境

大街道遺跡は、東武鉄道伊勢崎線「館林」駅の北方約1kmに所在し、縄文時代と平安時代の遺物の散布が見られる遺跡である。

館林市の中央付近は城沼から西へ走る谷と、北から東へ大きく湾曲するように走る谷とに挟まれている。本遺跡は、北側の湾曲している谷の観角部分に所在し、周囲を2本の細い支谷が走っている。

周辺の遺跡としては、西側に近世館林城の城下町が広範囲に広がっており、北側には縄文・古墳・平安時代の遺物を包蔵する岡野・屋敷前・岡遺跡がある。また、北東には古墳時代の集落跡が確認されている八方遺跡が存在している。

大街道遺跡は既に宅地化されており、近年ではアパートや大型スーパーの建設も進んできている。

本遺跡の調査は、平成17年度に続き2例目である。

### 調査の概要

大街道遺跡（平20地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は、1トレンチで15~25cm、2トレンチで50~60cmであった。調査地は西から東へ傾斜している。

トレンチ床面を精査した結果、両トレンチ南側で東西に走る幅約60cmの構1条（時代不明）を検出した。掘り下げてみたが、その性質を明らかにすることはできなかった。調査地は過去の住宅基礎や畑の耕作によるものと思われる擾乱部分が多くあった。

遺物としては、土師器片が少量出土した。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかつたことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第18図 トレンチ配置図 (1 : 1000)

## 5. 北小袋遺跡



第19図 北小袋遺跡 (1 : 5000)

### 所在地

館林市近藤町字北小袋171-61

### 調査原因

個人住宅建設

### 調査期間

平成20年11月10日～11月18日

### 調査面積

412m<sup>2</sup>

### 遺跡周辺の環境

北小袋遺跡は、東武鉄道小泉線「成島」駅の南方約1.5kmに位置し、近藤沼より北方に延びる谷の最上流部、東より谷に張り出した広い舌状台地の上に存在する縄文時代の包蔵地である。

この舌状台地は、幅300m、長さ700m、谷との比高差は2.8m程あり、遺跡はこの台地の先端部に広がっている。今回の調査地は遺跡のほぼ中央にあたる。

本遺跡では、これまでの発掘調査で、縄文時代早期や前期の遺物を伴った落穴や集石遺構などが検出されており、縄文時代の人々の生活の痕跡がうかがえる。

本遺跡周辺の遺跡には、谷を隔てた西側の台地上に縄文時代から古墳時代にかけての伝右衛門遺跡や近藤障子遺跡があり、また谷を隔てた南側には縄文時代から平安時代の遺物を有する小袋遺跡がある。さらに目を南方に抜けると、古墳時代の遺跡である苗木遺跡、北近藤第一地点遺跡、南近藤遺跡があり、特に北近藤第一地点遺跡からは住居址が多数検出されている。

### 調査の概要

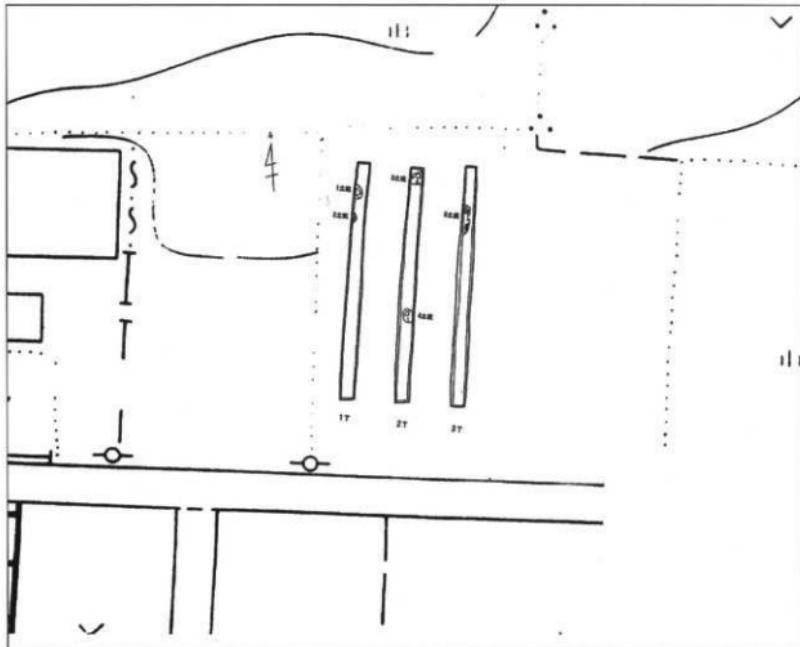
北小袋遺跡（平20地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に3本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域において現地表面からローム層までの深度は1トレンチで約80～100cm、3トレンチで約80～90cmであった。調査地はわずかに北へ傾斜している。

今回の調査で検出された遺構は、不定形な時代不明の土坑が5基であった。本調査地は現地表面から80cm以上下まで土の入れ替えがおこなわれており、恐らく本来のローム層表面より下までその範囲は及んでいると思われる。そのため、仮に住居等の遺構が存在していたとしても、土の入れ替え時の掘削により破壊され、遺物もその時点で外部に持ち出されたと考えられる。

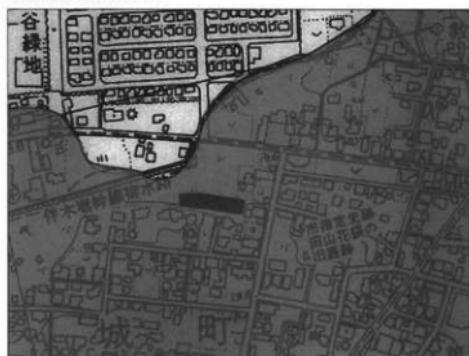
出土した遺物は縄文土器片が1点のみであった。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかつたことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第20図 トレンチ配置図 (1 : 400)

## 6.館林城跡・城下町



### 所在地

館林市城町乙674-7

調査原因 その他開発（整地）

調査期間

平成20年12月1日～12月18日

調査面積 1,213m<sup>2</sup>

第21図 館林城跡・城下町 (1 : 5000)

### 遺跡周辺の環境

館林城は、沼を天然の要害として築かれた平城で、大きく分けて3つの要素を持っている。城沼に突出する舌状台地を堀で区切り土塁を設けて囲ったもので、現在の向井千秋記念子ども科学館周辺を本丸とし、その南に南郭（現在の東広場）と二の丸（現在の市役所）、その西に三の丸（現在の文化会館周辺）と梯郭式に配置されている。この牙城部の北から西にかけてのやや低い洪積台地上に武家屋敷が配置され、牙城部を取り囲んでいる。

城下町となる町屋街はさらにその西側の洪積台地上に広がり、現在の中心市街地と重なっており、町人街である町屋と武家街である武家屋敷とは大手門によって分けられている。

さらに城下町の最も外周は堀によって台地を区切り、土塁をつくり城下町全てを囲い、5ヵ所の出入口をもうけ、牙城部・武家屋敷街、城下町を含めて守れるように網張りされた堅固なものである。

館林城周辺の遺跡としては、縄文時代の遺物が出土した大街道遺跡、外加法師遺跡、縄文時代の集落が確認された大袋Ⅱ遺跡、古墳時代の住居址が確認された尾曳町1遺跡などがある。また、城下町と重なつて、縄文～古墳時代の加法師遺跡、奈良・平安時代の遺物がみられる城町遺跡などがある。

今回の調査地は、城跡の北方、城下町を囲う外側の土塁（総郭）である。

### 調査の概要

館林城跡・城下町（平20地点）の試掘・確認調査は、土壘の現況に合わせ、南北方向に4本、土壘頂部に1本のトレーンチを設定し、土木重機により表土排除を行った（土壘頂部のトレーンチは人力による表土排除・掘り下げ）。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

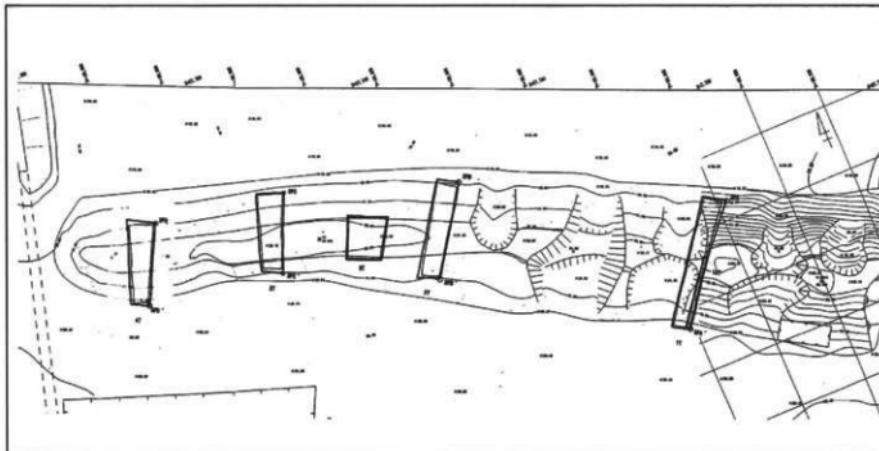
土壘の表面は竹木の根が予想以上に張り巡っており、その影響によるものか表土は乾燥及び根による層の破壊が進んでいて、土層の構成は非常にわかりにくいものになっていた。土壘中央から下に関しては比較的根の影響も少なく、版築の状況も明確に読み取れた。

1トレーンチは、戦時中の防空壕掘削と後世の崩落の影響を大きく受けている。2トレーンチは一部に近年のゴミ捨て穴と思われる掘削痕が見られたが、層の版築は良好に残されていた。3・4トレーンチはローム層の確認はできなかった。白色粘土を多く含む土が厚く堆積しており、地下水の湧出も見られた。版築の状況は明確に見ることができた。

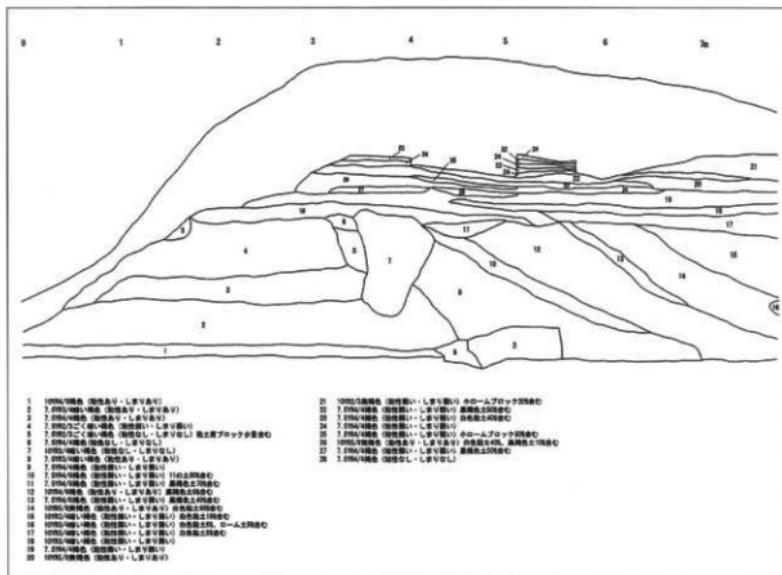
また、2~3トレーンチ間に土壘頂部にトレーンチを設定し、堀や柵列等の構造物の存在を確認したが、その痕跡は見られなかった。

遺物は、土壘内部より繩文土器片や近世の陶磁器片が出土した。

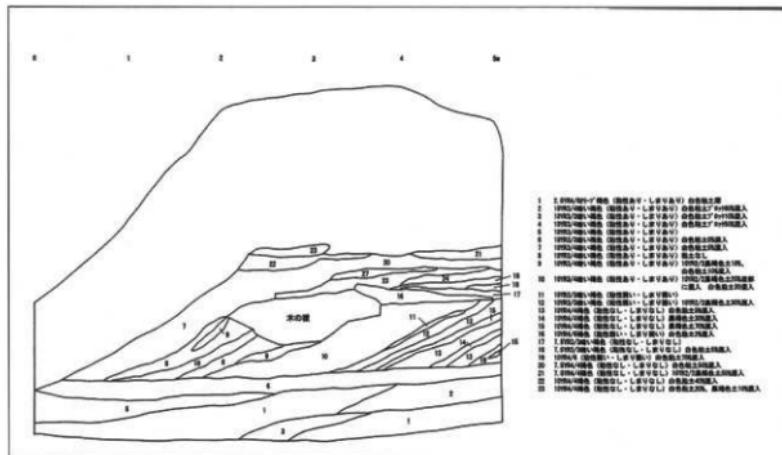
今回の調査は、土壘の構築状況の把握に主眼をおいて調査をおこなった。土壘の層構成を分析したところ、①過去に少なくとも1回以上の改修をおこなった。②西側は地盤が弱かった（湿地帯だった）ため地盤改良をおこなった。③土壘西側は現在の形とは異なり、虎口のような形態をしていた。などが推測された。



第22図 トレーンチ配置図 (1 : 400)



第23図 1トレンチ土層断面図 (1 : 50)



第24図 3トレンチ土層断面図 (1 : 50)

## 7.上三林古墳



第25図 上三林古墳 (1 : 5000)

### 所在地

館林市上三林町字台520-1

### 調査原因

個人住宅建設

### 調査期間

平成21年1月8日～1月21日

### 調査面積

100m<sup>2</sup>

### 遺跡周辺の環境

上三林古墳は、東武鉄道伊勢崎線「茂林寺前」駅より西へ約4km、館林市の南西端に位置する。古墳の南には県道熊谷・館林線が東西に走り、さらに南方には新谷田川が東流している。

古墳は、館林台地に明和町方面から逆ニの字型に入り込む大きな谷の微高地にある。南側は利根川に沿って沖積低地が広がり、この一帯は利根川の氾濫原となっている。

周辺の遺跡では、平安時代の遺物を散布する遺跡が多い。本古墳とほぼ隣接する形で南へ広がる台遺跡があり、南東には同じく平安時代の小曾根遺跡と中世城館址である三林城跡がある。また北西には新田西遺跡と新田北遺跡が広がっている。

明治10（1935）年から県内一斉におこなわれた古墳の調査結果をまとめた「上毛古墳総覧」には上三林古墳の記載はない。この地区で唯一掲載があるのは、本古墳から南東へ約200mのところに所在した三野谷1号墳だが、現在では消滅してしまっている。

古墳周辺は大きな開発の手は入っておらず、のどかな田園風景をとどめている。

上三林古墳の調査は今回が初めてである。

### 調査の概要

上三林古墳（平20地点）の試掘・確認調査は、住宅建設に伴う墳丘周辺の樹木伐採及び伐根予定区域に合わせ3本のトレンチを設定し、人力により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は1トレンチで約150～160cm、2トレンチで約120～150cm、3トレンチで約150～170cmであった。

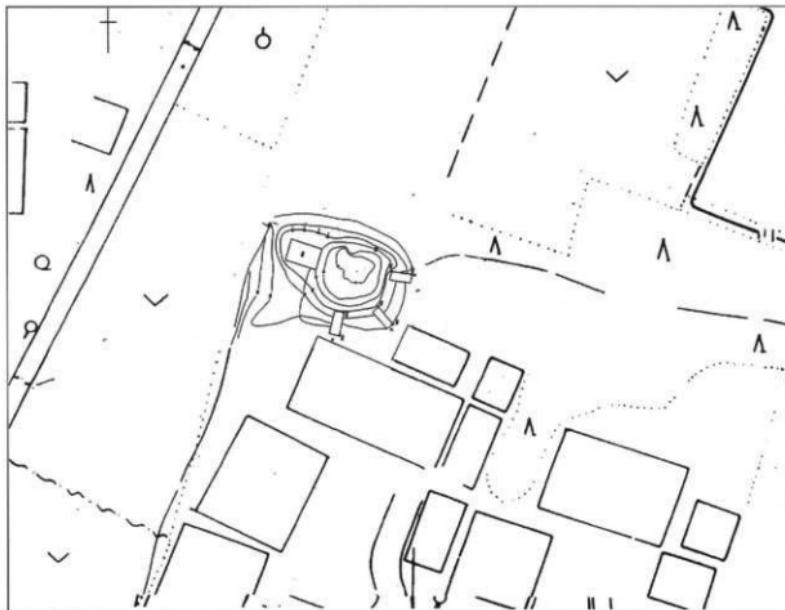
今回の調査では、本古墳で既往調査例がなく推定古墳であることから、古墳であるかの確認を目的として、樹木伐採等の影響がある部分に限って土盛の構成状況、周堀の存在などを調査した。

各トレンチでローム面まで掘り下げたが、掘削途中薄い粘土層を確認したものの、周堀は検出されず、また埴輪等の出土もなく古墳である確認は見出せなかった。土層も版築とはなっていなかった。

遺物は、各トレンチで中近世の土器片や陶磁器片が出土した。

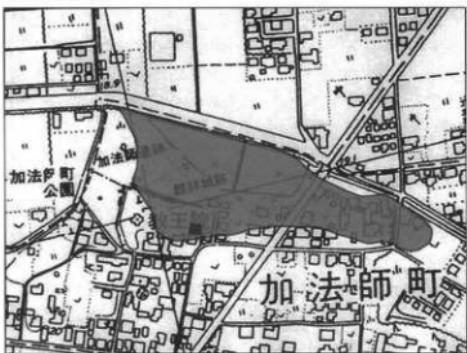
今回の調査においては、古墳としての性質を確認することはできず、未だ推定古墳としての城を出ない。今後墳丘の削平などの開発がおこなわれる際に墳頂部分等の詳細な調査をおこなっていきたい。

そのため、開発にあたっては埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第26図 トレンチ配置図 (1:500)

## 8. 加法師遺跡



第27図 加法師遺跡（1:5000）

### 所在地

館林市加法師町2174-18

### 調査原因

個人住宅建設

### 調査期間

平成21年1月28日～2月11日

### 調査面積

184.65m<sup>2</sup>

### 遺跡周辺の環境

加法師遺跡は、館林市街地の北東部、館林市役所の北方約1kmに位置し、渡良瀬川の形成した沖積地に突出する舌状台地上に所在する縄文時代～古墳時代の遺物を包含する遺跡である。過去に一部が調査され、縄文～奈良・平安時代の住居址が確認されている。

本遺跡は邑楽・館林台地の東北辺に位置する遺跡である。邑楽・館林台地の北側には渡良瀬川の沖積地が広がっており、沖積地には旧河道と思われる丘陵地と、それに沿って自然堤防の微高地が連なっている。台地と低地の境は崖を作っていることが多く、台地に接して一段低くテラス状の高まりがあることが多い。

遺跡周辺の旧地形は、邑楽・館林台地から北側に向かって緩やかに傾斜して沖積地に移行するものと思われ、先端は自然堤防の微高地へと連なっている。遺跡はこの舌状台地の中央部から北の傾斜地に所在するものと考えられている。

周辺の遺跡では、縄文時代の遺物が散布する外加法師遺跡、朝日町遺跡がある。また、古墳時代の遺跡として、尾曳町1遺跡、尾曳町2遺跡があり、城沼北には市指定史跡「山王山古墳」がある。奈良・平安時代の遺跡では、城町遺跡があり、台地全体には近世城館址の館林城跡・城下町がある。

平成8年度に遺跡の西側で調査がおこなわれ、縄文時代中期の住居址が確認された。また、平成11年度には遺跡中央部で試掘・確認調査がおこなわれ、同じく縄文時代の住居址が確認されている。今回の調査地は遺跡の南端にあたる。

### 調査の概要

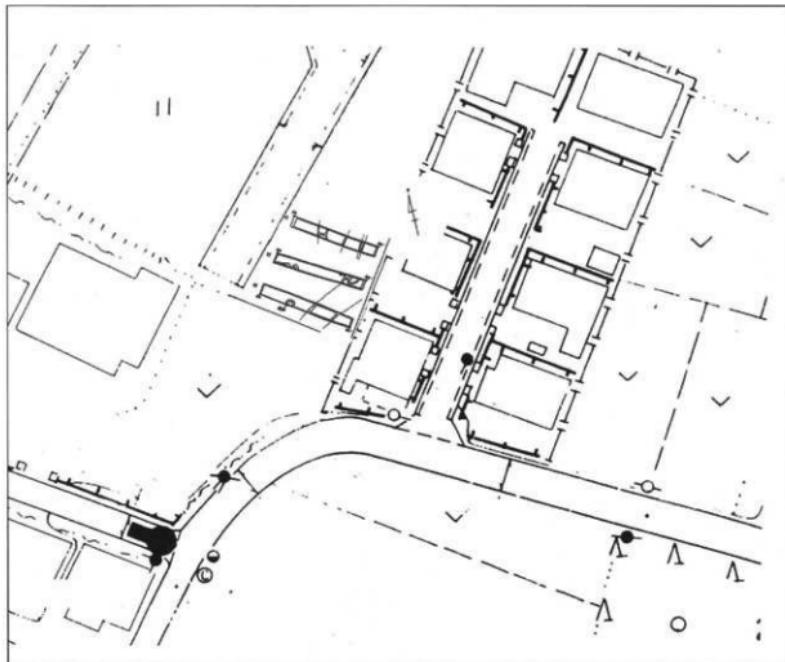
加法師遺跡（平20地点）の試掘・確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、東西方向に3本のトレントを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

現地表面からローム層までの深度は、1トレントで約50～60cm、2トレントで約40～50cm、3トレントで約50～60cmであった。調査地はほぼ平坦な地形をしている。

今回の調査では、各トレントでいくつかの掘り込みが見られたため覆土の除去を行ったが、覆土の下から地下水が湧出し、作業は困難を極めた。遺構の多くは時代を特定できない溝や土坑だったが、3トレント西寄りの掘り込みは中世の井戸址であることがわかった。また、2トレントから3トレントに延びる幅約3mの溝には1対の柱穴のような掘り込みが見られた。

遺物は、調査地全体から縄文時代から近世にわたる土器片や石器、陶磁器片が大量に出土した。中でも中世井戸址の底からは、「文永十年七月…」と刻まれた板碑片が出土している。

今回の調査において、中世の井戸址の他は明確な遺構の確認はできなかった。また地下水の影響から遺構の性質を把握することが難しい状況であったため、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第28図 トレント配置図 (1 : 500)

表3 遺物観察表

No.	種別 器種	法量	整形・調整方法等	胎土	①色調 ②焼成	残存度	出土位置
1	深鉢	口径 底径 器高	外面：隆脊を施し網文LRを充填している。口唇部と隆脊上は丁寧にナデられている。	角閃石 石英	①暗赤褐色 ②良好	口縁部 破片	3 T
2	深鉢	口径 底径 器高	外面：口縁部には1本の隆脊が貼られ、中心に半裁竹管状の工具で1条沈線が施される。口唇部は平行する沈線を1条引いた後その沈線に縱走する沈線が施される（共に半裁竹管状工具による）。表面・内面共に丁寧にナデられている。	長石 角閃石	①明赤橙色 ②良好	口縁部 破片	1 T 覆土
No.	種別	法量 (長最部・cm) /備考					材質
3	板碑	縦: 42.7 横: 7.5 厚さ: 1.3 「(バク) 文永十年七月□日 癸酉」の銘					緑泥片岩



第29図 出土遺物実測図

## 参考文献

- 戸沢光則編『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994  
小林達雄著『縄文土器の研究』 学生社 2002  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の遺跡2 縄文時代』上毛新聞社2004  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の遺跡4 古墳時代I(古墳)』上毛新聞社2004  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の遺跡5 古墳時代II(集落)』上毛新聞社2004  
館林市教育委員会『間堀遺跡発掘調査報告書』(館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集) 1982



1-1 間堀1遺跡 調査地



1-2 間堀1遺跡 遺構確認(南より)



1-3 間堀1遺跡 3号住居址完掘(東より)



1-4 間堀1遺跡 4号住居址完掘(西より)



1-5 間堀1遺跡 5号住居址完掘(北より)



1-6 間堀1遺跡 6号住居址完掘(北より)

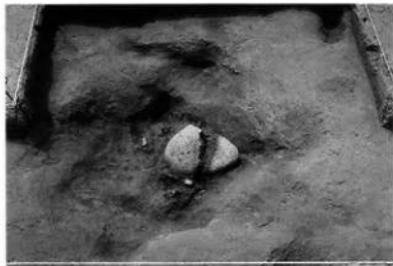


1-7 間堀1遺跡 1トレンチ遺物出土状況(北より)▲



1-8 間堀1遺跡 1トレンチ遺物集中箇所(東より)

## 写真図版2



1-9 間堀1遺跡 石皿出土状況



1-10 間堀1遺跡 集石土坑



1-11 間堀1遺跡 完掘状況(南より)



1-12 間堀1遺跡 出土遺物



2-1 小林遺跡 調査地



2-2 小林遺跡 1トレンチ遺物出土状況(東より)▲



2-3 小林遺跡 1トレンチ遺物出土状況



2-4 小林遺跡 焼土検出(南より)

写真図版 3



2-5 小林遺跡 1トレンチ完掘(東より)▲



2-6 小林遺跡 2トレンチ完掘(西より)▲



2-7 小林遺跡 埋め戻し



2-8 小林遺跡 出土遺物



3-1 大袋城跡 調査地



3-2 大袋城跡 1トレンチ完掘(南より)▲



4-1 大街道遺跡 調査地



4-2 大街道遺跡 1トレンチ完掘(南より)▲

## 写真図版 4



4-3 大街道遺跡 2トレンチ完掘(南より)▲



4-4 大街道遺跡 埋め戻し



5-1 北小袋遺跡 調査地



5-2 北小袋遺跡 作業風景



5-3 北小袋遺跡 2トレンチ完掘(北より)▲



5-4 北小袋遺跡 3トレンチ完掘(北より)▲



6-1 館林城跡・城下町 調査地



6-2 館林城跡・城下町 重機掘削



6-3 館林城跡・城下町 作業風景



6-4 館林城跡・城下町 1トレンチ土層確認(南西より)



6-5 館林城跡・城下町 2トレンチ土層確認(南西より)



6-6 館林城跡・城下町 3トレンチ土層確認(北西より)



6-7 館林城跡・城下町 4トレンチ土層確認(南西より)



6-8 館林城跡・城下町 5トレンチ完掘(西より)



7-1 上三林古墳 調査地



7-2 上三林古墳 作業風景

## 写真図版6



7-3 上三林古墳 2トレンチ粘土層検出(東より)▲



7-4 上三林古墳 1トレンチ完掘(南より)▲



8-1 加法師遺跡 調査地



8-2 加法師遺跡 1トレンチ完掘(西より)▲



8-3 加法師遺跡 2トレンチ完掘(西より)▲



8-4 加法師遺跡 3トレンチ完掘(西より)▲



8-5 加法師遺跡 井戸址完掘(北より)



8-6 加法師遺跡 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	たてばやししないいせき はくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成20年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査			卷次	_____			
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書			シリーズ番号	第45集			
編集者名	荒川博一			編集機関	館林市教育委員会			
編集機関所在地	〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号							
発行年月日	2009(平成21)年3月31日							
市町村コード	102075							
所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
間堀1遺跡	上赤生田町字上ノ前	116	361322	1393252	20080515～20080701	144m <sup>2</sup>	個人住宅	
小林遺跡	野辺町字申子	86	361250	1392808	20080709～20080718	384.91m <sup>2</sup>	道路	
大袋城跡	花山町字大袋	69	361405	1393348	20080822～20080902	1,072.73m <sup>2</sup>	宅地造成	
大街道遺跡	大街道一丁目	31	361502	1393149	20080822～20080902	2,000m <sup>2</sup>	道路	
北小袋遺跡	近藤町字北小袋	54	361405	1393047	20081110～20081118	412m <sup>2</sup>	個人住宅	
館林城跡・城下町	城町	33	361447	1393246	20081201～20081218	1,213m <sup>2</sup>	その他開発 (整地)	
上三林古墳	上三林町字台	90	361258	1392930	20090108～20090121	100m <sup>2</sup>	個人住宅	
加法師遺跡	加法師町	39	361450	1393300	20090128～20090211	184.65m <sup>2</sup>	個人住宅	
遺跡名	種別	時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
間堀1遺跡	集落跡	縄文時代		住居址4、集石土坑1 (縄文時代)	縄文土器、石器	一部擾乱		
小林遺跡	包蔵地	古墳・奈良・平安時代		住居址1(古墳時代)	土師器			
大袋城跡	城館址	中世		なし	なし	擾乱		
大街道遺跡	包蔵地	縄文・平安時代		溝1(時代不明)	土師器片	擾乱		
北小袋遺跡	包蔵地	縄文時代		土坑5(時代不明)	縄文土器片	土地改変		
館林城跡・城下町	城館址	近世		土壙	繩文土器片、陶磁器片			
上三林古墳	墳墓	古墳時代		なし	陶磁器片、土器片			
加法師遺跡	包蔵地	縄文・奈良・平安時代		井戸1(中世)、溝等	縄文土器片、板碑等	湧水		

---

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第45集  
**館林市内遺跡発掘調査報告書**  
—平成20年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

---

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）  
〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111  
印 刷 荒瀬印刷株式会社  
発行年月日 平成21年3月31日

---



文化財登録シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>